

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520001

研究課題名(和文)戦後ドイツ哲学から出発する公共性の歴史的構造的探究

研究課題名(英文)a historical and structural investigation of publicness departing from German philosophy after the Second World War

研究代表者

後藤 嘉也(Goto, Yoshiya)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50153771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：戦後ドイツ哲学と現代フランス思想の歴史的探究に裏打ちされた公共性(公共空間)の思考を構造的に行い、次の点を明らかにした。

(1)公共性は、分割(自他のずれ)を要件とするがゆえに、全体性ないし合一から明確に区別される。(2)それは、絆の現前しない共同体というほとんど不可能な可能性であって、その根底には、他者が他者であり自己が自己であるようにする「存在することの倫理」がある。(3)この意味での公共性(公共空間)は、光あふれる未来の世でもなければ、欠損だらけのこの世界そのままでもなく、私たちの生きるこの世界とほんの少し異なる平和の地としてはるかに望まれ、いまここに到来しつつある。

研究成果の概要(英文)：By a historical and structural investigation of publicness departing from German philosophy after the Second World War, we made clear three points as follows.

1. Publicness is clearly distinguished from totality or union, because division or difference between ones and others is the necessary condition for it. 2. Publicness is an almost impossible possibility of the community without bonds, and the basis of it is "ethics of Being" that let ones and others as they are. 3. This publicness is not a glorious world that will come in future, nor this world with a lot of deficiencies, but it is viewed from distance here and now and is coming as a peaceful land that is slightly different from this world where we live.

研究分野：哲学

キーワード：公共性 複数性 現代ドイツ哲学 現代フランス思想 存在することの倫理

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した背景には、公共性の思考や、戦後ドイツ哲学、現代フランス思想に関する次のような現状認識があった。

(1) 戦後ドイツ史ないし戦後ドイツ(政治)思想史を過去の克服にも着目して論じる研究は枚挙の暇がなく、多大な成果をあげてきた。E. Wolfrum、P. Reichert、H. Glaser、三島憲一、宮田光雄、石田勇治等々。それらは、戦後ドイツが自己正当化の潮流と過去の清算という課題との軋轢のなかで歴史を刻んできたことを精緻に跡づけている。しかし、それらは公共性という主題との連結を明確にしておらず、まして狭義の哲学者たちを視界に入れないのが通例である。

(2) 公共性の思考は、英米の政治哲学も含め現代思想の一大トピックであり、それらはしばしば戦後ドイツ哲学からも養分を吸収してきた。アーレントやハーバーマスがその代表であり、その後の研究者たちも踵を接している。いろいろな研究者が明らかにしたように、二人の相違は、合意形成と差異尊重のどちらに重きを置くかという点にあり、これは、公共性をめぐる思考の対立の原型をなすといってよい。

しかし、その潜勢力をデリダやブランショなどのフランス現代思想とも対話して表に出す試みはまだ不十分である。一方、フランス現代思想の研究者は、過去の克服を背負わされた戦後ドイツ哲学の展開には関心が乏しい。

2. 研究の目的

研究代表者は、実存(自己の存在)をめぐる思考から他者を、さらに公共性を問い、それをまた実存の思考に打ち返すという研究

の全体構想をもっている。

そのなかにあって本研究は、戦後ドイツ哲学の展開を、ナチズムという過去の克服と公共性の思考に着眼して追跡することから出発して、公共性について歴史のおよび構造的に考察することを目的とした。

そのために、戦後ドイツ哲学の展開に加えて、歴史的には戦前戦中のドイツにもさかのぼり、また1960年代末からのフランス現代思想の歴史的研究にも目を配りながら、公共性のいわば共時的研究を行うことをもくろんだ。

3. 研究の方法

(1) 公共性について、統一なき統一(各人が独自な存在である点では非統一だが、その点を相互に保証する点では統一である共同性)はどのようにして可能か、という視点から考察する。

(2) 歴史的な方法によって、戦後ドイツ哲学の展開を「過去の克服と公共性」という視点から綿密に跡づけ、1960年代後半以降の現代フランス思想における共同体にかかわる議論を公共性の思考に組み入れるために整理する。

(3) 以上の研究を総括して、歴史的研究に裏打ちされた公共性の思考を共時的に行う。

4. 研究成果

(1) まず、非対称的共同性についての研究成果を集約し公共性をめぐる諸課題を展望した。

すなわち、本研究全体の予備段階として、研究代表者がこれまで行ってきた非対称的共同性に関する研究を振り返り、そこから浮かび上がった公共性をめぐる諸問題を次の

ように素描した。

非対称的共同性の研究成果を公共性の問題に向けて集約した。非対称的共同性とは自己に対する他者の優位を意味するが、第三者の登場（正義）という場面ではこの非対称性を部分的に放棄せざるをえない。非対称性に忠実であることは、三人以上からなる共同性である公共性と容易には両立せず、公共性は統一性として全体性に傾くのではないか、という点を検討した。

自他の非対称的共同性は、統一なき統一（各人が独自の存在である点では非統一だが、その点を相互に保証する点では統一である共同性）であることが見込まれることを示した。しかしこれはアポリア（デリダ）であって、容易ならざる事態であるから、歴史的（通時的）および構造的（共時的）分析の必要性へと導いた。

(2) 戦後ドイツ哲学の展開を「過去の克服と公共性」という視点から追跡した。

ナチスの政権掌握から第二次大戦にかけてのハイデガーとヤスパーズの哲学の動向を政治とのかかわりに結びつけて特徴づけた。そのさい、ナチスへの積極的関与者と国内亡命者と国外亡命者という三類型を理念化した。

戦後ドイツが過去の克服という課題にどう向き合ってきたかを政治史や思想史の場面で浮き彫りにした。

ハイデガー、ヤスパーズ、フランクフルト学派第一世代の哲学を、またショーレムの思想を、過去の克服という課題との取り組みと公共性の問題関心という視点から浮き彫りにした。その結果、ハイデガーの総駆り立て体制（Ge-stell）、ヤスパーズのコミュニケーション（交わり）への意志としての理性、アドルノの自他の非同一性という考え方は、いまなお現在している過去と対峙し公共性に向き合うそれぞれの仕方であることが明

らかになった。

上の世代を批判的に摂取しつつ、過去の克服を目指しながら展開されるアーレントの公共性の哲学とコミュニケーション的行為の理論にいたるハーバース哲学を、あるべき公共性ということをめぐる対比した。そこから、統一性と複数性のアポリアを見出した。

(3) 現代フランス思想における共同体の問題系を公共性の思考のなかに組み込んで次のように整理した。

ブランショ、レヴィナス、デリダ、J=L・ナンシーなどから、他者の優位・来るべき民主主義のアポリア・合一と分割という問題系を浮かび上がらせた。

ドイツ哲学に見出した上記の、公共性の思考における統一性と複数性のアポリアとを対比し、構造が類似していることに着目した。そのさい、フランスの思想家たちが、ハイデガー、アドルノ、アーレント、ハーバースと直接のおよび間接的に取り組んでいる姿の内実をも明らかにした。

以上の2点によって、公共性に関する構造的・歴史的思考の準備が整えられた。

(4) 以上の研究を総括して、現代ドイツ哲学と現代フランス思想の歴史的研究に裏打ちされた公共性の思考を共時的に行い、次の点を明らかにした。

公共性は分割（自他のずれ）を、しかも他者の優位を要件とするがゆえに、全体性ないし合一から明確に区別される。

それは、絆の現前しない共同体というほとんど不可能な可能性であって、その根底には、他者が他者であり自己が自己であるようにする「存在することの倫理」がある。

この意味での公共性（公共空間）は、光あふれる未来の世でもなければ、欠損だらけのこの世界そのままでもなく、私たちの世

界とほんの少し異なる平和の地としてはるかに望まれ、いまここに到来しつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

後藤嘉也、到来しつつある世界、あるいは絆を欠いた共同体、思索、査読有、47巻、95-116、2014

後藤嘉也、アレーテアから死すべきものたちの公共空間へ、ハイデガー・フォーラム、査読有、7巻、90-101、2013

〔学会発表〕(計 1件)

後藤嘉也、アレーテアから死すべきものたちの公共空間へ、ハイデガー・フォーラム、2012年9月16日、仙台

〔図書〕(計 1件)

秋富克哉、安部浩、古荘真敬、森一郎、後藤嘉也他、ハイデガー読本、法政大学出版局、2014年、403

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

後藤嘉也(GOTO YOSHIYA)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50153771